

特 賞

「平和をかみしめながら・・・」

大館市立有浦小学校 六年
駒木 彩実

昨年、平和の作文を書いたから、「平和」についてのニュースに関心を持つ事が多くなりました。

その一つは、安城市に留学しているアフガニスタンの少女が日本について語った内容です。日本へ来て一番驚いた事は、一日中電気が使える事だそうで、感謝の気持ちを述べていました。日本では普通の事なのに、それができない国があるのです。私達は、毎日何も心配なく電灯をつけ、冷蔵庫で冷えた物をおいしく食べ、家族と団らんができる事は、とても幸せな事だと気づきました。アフガニスタンでは、大切な家族や友と一夜で永遠の別れとなる事があるそうです。また、子ども達は平和の意味を知らないというのです。そんな環境にいたから、日本に来てからは、一日一日が大切で、夜中まで日本語の勉強をし、帰国してから月の光で勉強するのだそうです。そして、将来はエンジニアになってもう一度日本に来たいと話していました。目標を持ち努力している少女の姿に、感心しました。

二つ目は、二人の作家の対談の内容です。対談で、学校でのいじめやそれによる自殺などの悲

しい出来事は、「平和の代償」だと言っていました。この事は、どういう意味なのか、まだよく分かりませんが、平和は世界中の人々が一番望んでいる事だと思います。決して平和な今の日本が悪いのではなく、平和に対して私達が無関心である事が問題だと思います。当たり前前の事を当たり前と思わず、幸せな生活を送れる事に感謝の気持ちを持ち、生きていく事が大切なのではないのでしょうか。アフガニスタンの少女は、毎日の生活に感謝しながら、目標を持って必死に生きています。私は、この少女から多くの事を学びました。私も平和の意味をかみしめながら、今日を生きている事に感謝し、少女のように目標を持ち、努力する人間になりたいです。

特 賞

「もしも私が国際機関で働いたら」

東横学園中学校 二年
岡部 達美

私は、八年間、地球の温暖化に挑戦してきました。千代田区の「エコしぐさ」三十箇所の一つとして登録。電気をこまめに切る、冷暖房の温度設定を、夏は高めに、冬は低めにする等、二十項目の実践を続けて来ました。

その中でも、一番自信をもって行って来たのが、「戦争の日」です。当初は、亡くなった祖母から、沖縄戦の経験を聞き、平和は、努

力なしには手に入れられないものだ、知りました。そして、その時、戦争中のお墓の中のろうそくを灯しての生活も知りました。「よし、電気がない生活をやってみよう。」こうして、家族で、週一日、まる一日、電灯を点けず、夏はクーラー、冬は暖房を使わない生活が始まったのです。

しかし、それも、度重なる地震、水害、雪害と、異常気象に圧倒され、地球の異変の方が、戦争より怖いことに気づきました。そのため、今では、地球温暖化と戦う「戦争の日」となりました。

八年の間に、確かに、少しずつ、環境問題に関心のある人は増えて来ました。しかし、実際、継続的な行動をとる人となると、あまり、増えませんでした。その間、世界では、テロの嵐は吹き荒れ、局地戦も何箇所か起こりました。まさに、戦争どころではない苦しい状態の地球で、戦いが繰り返されて来たのです。

私は、このような争いが、資源の獲得にからむ競争から発生しているのではないかと、思っています。南極大陸は、世界のどこの国のものでもありません。人類のもので、しかし、中東では、何十年にもわたり、資源をめぐり、大国の利害がぶつかっています。アフリカでも他の大陸でも、希少資源をめぐり、ひどい戦いが起こっています。最近、とうとう、北極の資源をめぐって、競争が始まったようです。「資源ナシヨナリズム」と言うほど、